

戦争の時代、動揺の中で求められる理性
～研究者として自己の在り方を問い続ける～

新理事長 阿古智子

ロシアによるウクライナへの軍事進攻によって、世界は激しく動いている。核を保有する大国が一方的に軍事力で他国を侵略するという暴挙は、第2次世界大戦後の秩序を根底から覆した。我々は日々伝えられる戦場の悲惨な光景に胸を痛め、動揺しながらも、研究者としてこの時代を冷静に捉え、自らの立ち位置を確認し、表現しなければならない。特に私は、歴史のコンテキストにおいて「自己」を認識することが重要だと考えている。

プーチン政権が今回の侵攻を決断した背景には、「帝政時代からソ連時代に至る大国ロシアの伝統をつくり直せるのは我々だけだ」という自負があり、ソ連崩壊の過程で分離させられた領土を取り戻すのだという、歴史的記憶に根ざした情念が彼らを駆り立てているのだという（「ロシア「帝国」の幻影復活 相克のウクライナ近現代史」『日本経済新聞』2022年3月1日）。軍事侵攻を正当化しようとするロシア政府の主張について、あるいは日本としてロシアとどう向き合うべきかといった問題に関して、日本の論壇では論戦が繰り広げられている（「長老たち「ロシアの言い分聞くべき」 若手専門家が猛反発」『毎日新聞』2022年5月18日）。あるグループは、ロシア軍とウクライナ軍に即時停戦し、停戦交渉を始めるよう呼びかけた。それに対して、猛然と反対の声を上げる研究者たちもいる。正義や人権、戦争の終わらせ方に関して、異なる考え方を持つ研究者の間に溝ができていくのだ。

現在まさに進行している事象である。研究者は何を目的に研究をするのか。どのような問題のどこに焦点を当て、どのような角度から分析するのか。そして、どのような政策提言を行うのか。我々研究者の思考、表現、行動が鋭く、直接的に各方面に影響を与え、世論を、政府を、世界を動かしている。研究者は象牙の塔の静寂・孤高の中で思索に耽っている場合ではないのだ。

しかし、戦争や紛争で緊迫しているから、関連する問題に取り組む研究者の位置付けが問われるという訳ではない。平時（表面上、緊迫した状態ではない時）においても、研究者は自らの在り方を問い続けなければならない。歴史学、社会学、政治学、経済学、文学など、研究のディシプリン、手法、テーマによって、研究者の実社会との関わり方は異なるが、我々は皆、時代のコンテキストの中に存在し、その中で価値判断し、生み出される言説と対話していく。

昨今、ロシアとの比較の観点から、中国に関連する歴史と現在が論じられることが増えている。現在のロシアと中国の指導者は共に、帝国時代の領域意識を持って統治を行おうとしているという見方があるからだ。葛兆光は、帝国にほぼ等しい巨大な領域と複雑な人間集団を引き継いだロシアと中国は、多様な民族と広大な領域を抱えながら、ロ

シア人や漢人という絶対的主流を占める民族がいた点がよく似ていると指摘する（「(インタビュー) よみがえる帝国の記憶 中国の歴史学者・葛兆光さん」『朝日新聞』2022年3月25日）。さらに、「失われたものを取り戻す」という帝国の君主の発想に近い、帝国の記憶に基づく意識は、現代国家の主権を軽視しており、ウクライナに対するプーチンの主張が通るなら、ウラジオストクやサハリンは清朝のものだったということになると述べる。

葛兆光によれば、漢族を中心とした国家としての明確な意識が生まれ、漢族イコール中国人というアイデンティティの基礎が作られたのは宋代だという。それまでは、辺疆（辺境）というぼんやりとした意識だけがあり、明確な境界がなかったが、文明と野蛮という意識があり、文明の力で辺境を感化するという考え方もあった。しかし、広大な領土を持つ元や清が出現し、モンゴル族やチベット族、朝鮮族、ミャオ族、イスラムを信仰する諸族らを含む大きな中国が形成された。少数民族問題や国境問題の多くは小さな中国と大きな中国という二つの中国が混同されてきたことに由来し、大きな中国の基礎の上にできた現在の中国は、「多元的で一体性を持った国家」と言われるが、一体性はこれから追求すべき目標であると意識すべきだと葛兆光は強調する。

常に変化し、移動しながら形成されてきた「中国」を、我々はどのように捉えるのか。百年に及ぶ「屈辱の歴史」が終わり、ようやく「中華民族の偉大なる復興」の時代が来たという意識、これまで世界のルール構築のプロセスから排除されてきたのだ、今こそ我々がイニシアティブを取るべきだという意識の高まりがある中で、「欧米」の制度や価値観に対する疑義が生じ、「中国」の制度や価値観に対する普遍性が声高に叫ばれている。

すでに出来上がっているルールや秩序は簡単には変わらず、後発国家の苦悩はあるのだろう。だが、国際金融のシステムも、貿易のルールも、紛争の平和的解決を義務付ける国連憲章や国際法も、長い時間かけて国家間で調整を行った上で築き上げてきたものだ。一方的な力の行使による現状変更は受け入れられないし、さまざまな歴史認識や世界観、文化や思想を互いに受け入れる開放性こそが、学問を発展させ、人間性を豊かにするのである。

前置きが長くなったが、今般、私は現代中国学会の理事長に就任するのにあたり、気持ち新たに、自らの立ち位置を確認しようとしている。開放的な学問の環境をつくり、次世代を育てていくことに力を尽くしていきたい。我々が存在する歴史のコンテクストを、この時代を理性的に捉え、葛藤しながらも表現することをあきらめない。それこそが、我々の使命だと考えている。